The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	大坂の草分け國學者下河邊長流と懐徳堂
Author(s)	羽倉, 敬尚
Citation	懐徳. 1973, 43, p. 17-41
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90508
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

大坂の草わけ國學者下河邊長流と懷德堂

羽倉敬尚

西村天囚の名著「懷德堂考」の序文（松山教授記）に「懷德堂は浪華の公學にして私塾にあらず」といふ天囚の言が記されておる。この考證は謂はば定義で、天囚がこの學堂について永年にわたり苦辛研究の結果、種々の史實によって述べたこの學堂の性格そのものであり結論であって、その說明は卽ち「懷德堂考」（以下考と略す）によって殆んど盡されあり、形式上は江戸の幕府將軍の公許を受け、その監督のもとに創められ、約二百餘坪の敷地を提供せられ、諸係りを免せられ（免稅）寬政度の燒失には、復舊費三百兩の補助を受けたが、その他はすべて大阪人の計算によって百四十餘年經營が續けられた大阪人の學校で、通俗に大阪學校とも云われておった名校で、大阪人の誇りでもあったのである。

この名校は明治維新の學制により、惜しくも同二年、閉校となった。思うに時勢による敎育制度の變遷上、止むを得なかった事であろう。かくて歲月は流れ、明治末年から大正初年にかけ、この忘れられた、この學堂の復興記念會が發起成立せられた。今「考」の末尾の學堂小史によると、明治四十三年一月、大阪人文會の例會に、この學堂初期の名敎授五井蘭洲（名純禎〔元祿一〇〕――一七六二〔寶曆一二〕）の傳記を天囚が講じた處、聽者に大變な感動を與え、初めて商都大阪に加樣な學者があったことが知られ、これが發端となり、俄然、蘭洲等學堂師儒の爲めにすべからく公祭してその遺業を顯彰すべきであるとの議が殆んど全會一致で發議された。

次いでこの議は大阪府教育會に移され、先づ學堂に緣ある鴻ノ池住友等諸家後裔その外、一般有志を糾合して發起人とせられ、遂に翌四十四年十月五日（享保十一年の當日が幕府の開校官許日で、この二年前の同九年十一月、三宅石庵・中井誠之により私塾懷德堂が開かれておる）復興記念會の成立となり、次いで市公會堂に於て祭事擧行、講演會、先儒の遺著遺物の展觀が行われ、その後、この會が法人組織となり、遺書の一部が記念出版せられ、別に堂關係の先賢墨迹一帙も出版せられた。又この間、學堂に最も因緣深い師儒家後裔中井木菟麿氏から、幸いに遺り傳えられた遺書の大部が會に寄納せられた。

こえて大正四年六月現在の今橋四丁目（舊名は尼ガ崎町一丁目北側、現日本生命保險會社の位地）の舊地跡ではないが、東區豐後町にこの學堂が重建され、昭和廿年、戰災の罹厄まで、約三十年間、この新學堂に於て、收藏の遺書の調査研究、及時世に卽應した一般學術講演等舊事を繼承した行事がなされて、相當の成果をおさめた。また別に大正六年、舊地跡には、日生會社に於て舊址を彰表した豐碑が中庭に建てられ撰文者は天囚であった。昭和三十七年、赤レンガ建築が石造に改築の際、會社表門入口（略々舊學堂正門の位置）の右側に、この碑が移し出され、併せて傍らに略說明のブロンズが附設された。

その後、惜しくも豐後町の新學堂建造物は、昭和廿年の戰禍により燒失したが、幸い石造書庫に收藏の圖書類は免れたので、これらは學堂遺書として大阪大學に移管せらるることとなり、又春秋二回に講座が開催され、現在に至っておる。

思うにこの大阪唯一の公學懷德堂は現在、その形容は失われてしまっておるが、明治初年まで殆んど百四十餘年にわたり、大阪庶民の風敎訓化に扶植された精神は、暗默無形ながら、現大阪人の心髓の中に傳えられておると云っても過言でなかろう。

因みに、この學堂舊事を、苦辛研究し、府立圖書館今井貫一館長と共にその再興に寄與大であった故西村天囚子を

天囚像

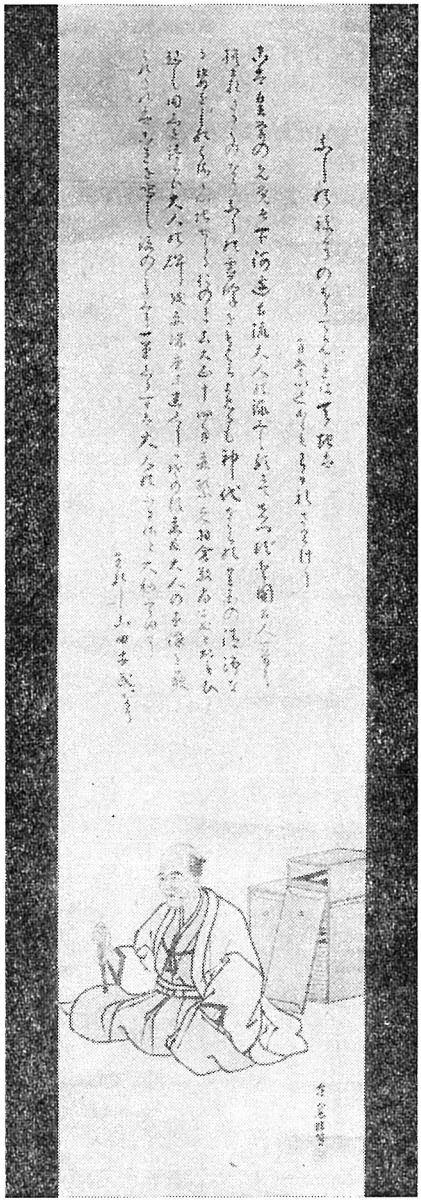
追偲しその略歴を述べる。

子は鹿兒島縣の大隅、種子が島の生れ、壯年鄉を出でて同縣出身、明治時代の碩（せき）學長命者重野安繹（つぐ、號成齋）に師事し、大阪朝日新聞記者として文筆を以て盛名あり、碩園と號し、學堂研究はその間の力作で、別に日本宋學史の名著あり、これによって學位を得た。晩年、宮內省勅任ご用掛に推されたが、惜しくも大正十三年、六十才で「考」の單行本成るの前、（學堂研究はその前に新聞に連載發表）更に重建學堂の完成を見ずして終った。

以上、いささか懷德堂略史を述べたが、實はこの中に名の出た異色ある學堂師儒、五井蘭洲の先師格に當るのが、本文命題の大阪の草わけ國學者（贈正五位）下河邊長流であり、卽ち長流は蘭洲の父持軒、名守任の和學の師で（「考」の七頁、持軒傳中にあり）左樣の緣からか、長流莫逆の友の有名の大阪の萬葉學者僧契沖墓（東區餌差町、圓珠庵）には蘭洲が文を書いておる。蘭洲は和漢兼該の博學で、兩學の著書もあるが、專攻は漢であるからとの謙讓からも和學の契沖の撰文を、一應は辭退した旨が文中に記されておる。契沖は長流より十五年若い學弟である。

五井蘭洲の父、持軒（一六四一〔寛永十八〕――一七二一〔享保六〕）は直接、懷德堂には關係ない。それは年代が少し古いからである。しかし「考」には學堂開校の前記として、大阪の學問を述べ、その中に持軒を重視し、隨分くわしく述べておる。次にその要點を述べる。

持軒の祖父守香（號禪久）は壯時、奈良に住み、和漢の學を修め詩歌に參じ家に日本紀を傳えた由、長じて江戶に出で晩に大阪に歸る（元和、寛永の頃かとあり）沒年知られず、次子は守純でその次男が持軒で大阪に生れ通稱加助、若くして京に出で儒學を伊藤仁齊（古學）・中村惕齊（朱子學）に、和學を長流に學び、醫を向井元舛・中島長安に受け、寛文十年（卅才）大阪に歸り、塾を開いて約五十年間、庶民を敎えて倦まず、時人は四書屋と稱えたという。沒後、



昭和十八年八月、東大史料編纂所に寄納

ふじの　ねにのぼりて見れば　天地は
まだいく程も　わかれざりけり

こは皇學の先覺者下河邊長流大人の詠みし歌にて先つ頃愛國百人一首に撰まれたるものなり、ふじの靈峰を、もはら詠めるも神代ながらの皇國の清淨なる姿をしのばるゝ心地せらる。おのれ去大正十四年森繁夫、羽倉敬尙二氏と思い起し同志を語らひ大人の碑を圓珠庵に建てしが、その後、森氏が大人の畫像を獲られたれば、これを寫し後の形見に一筆しるすは大人のふる里大和宇田に生れし

山田安民なり

（ロート製藥㈱創始者）

墓に仁齊の男東涯が銘文を系（かけ）たがその中に前略「提誨ニ方アリ青衿（きん）門ニ滿ツ、其人亡シト雖遺德永ク存セン（秩序ある教育法であったので青年達が澤山入門した云々）とある。その子に碩儒蘭洲が生れたのも當然である。蘭洲の門に出たのが中井竹山・履軒の兄弟二大儒でこの二碩學によって懷德堂は全盛の黃金時代を招來し、幕府官立の江戸湯島の昌平校を凌ぐとの評判が立ち、大阪の誇りとなったのである。

持軒は直接、懷德堂には學緣はないが、天壽を享け、學堂開學の頭初、學堂の學主に推された三宅石庵（一六六五〔寛文五〕――一七三〇〔享保十三〕）とは、石庵が廿四年若いが相識であり、文交があった。石庵は朱子學者で又陽明學をも信じ、元祿十三・四年頃（十三年は一七〇〇）大阪に出てきたから、年次の上で約二十年、持軒と文交あり、石庵は持軒を善人と稱し、持軒は石庵を君子と稱した由、持軒の門人の多くがその沒後、石庵に師事したことを見ても、二人は切嗟親交の間柄であったことが知られる。

この持軒の師が下河邊長流（一六二三〔元和九〕――八五〔貞享二〕）であるが、長流についてはアトに、大正十四年その建墓について述べ、その建墓の際、辱知の故佐佐木信綱翁が朝日新聞に寄稿した相當くわしい、まとまった行歷（アトに全文をのせる）があり、その全文をのせる關係上、それと重複にならない樣、時代は前後するが、昭和以後、發見發表された傳記史實を拾うこととする。

その一は昭和六年、雜誌「國語と國文學」第八卷第四號の近世人物傳の權威森銑三氏の「新資料による長流傳」で、これは、和學部門で水戸光圀に仕えた安藤年山爲章（兄爲實は同じく仕えて禮儀類典の編集擔當）の「年山筆記」を主要資料としたものである。なおこれの引用記述中に、筆者私の現地實査等（契沖についての）を補注し書加えておく（森氏文は近年、同氏著作集第二卷に收錄されておる。またこの文資料原典の筆記は水戸藩儒立原翠軒の集錄命名で同藩後學小宮山楓軒の手寫本として東京靜嘉堂圖書館に傳藏）。

森氏への文の要項をあげると

一、長流の仕へたのは、大和ノ國（奈良縣）小泉藩主の片桐氏一族の片桐又七郎且昭かとされておる（補注、現在は郡山市小泉町、その以前は生駒郡片桐村、のち片桐町となり、今は舊藩地名を採ったのか小泉町となっておる、別に、もと生駒郡に長流の生地と傳うる龍田村があったが昭和廿二年、隣村の法隆寺村・富郷村と共に斑鳩（いかるか）町に合併せられ、現在は同町内の龍田である）。

二、寛永十九年、長流十八才の頃より連歌の道に入る。

三、正保四年、廿三才、長流江戸にあり、主公片桐氏の參キンに從行か、この歸國の途次、入京し、歌人の隱士、木ノ下長嘯（ショウ）を洛西小鹽山に訪ひ入門か。

四、慶安二年、廿五才、再び江戸に下向したが、志を得ずして歸鄉、この頃、片桐氏を致仕したか。

五、同　三年、六月、木ノ下長ショウ終る、廿六才、此頃大阪に住みて、俳人西山宗因に師事す。

六、同　四年、廿七才、この頃、五井持軒入門す。

七、承應二年、廿九才、入洛して京の公卿、大臣家の三條西家に仕う（注、この頃同家は後の權大納言實敎の壯年時）。

八、萬治二年、卅五才、この頃より三條西家所藏の萬葉集古鈔本の謄寫に着手す、この年、自著、歌仙抄・萬葉集名寄を刊行す（補注、長流の加様な萬葉研究が、永戸に傳聞され、後年の長流への囑命があったのだろう、光圀の室は近衞關白信尋（ひろ）の女、尋子であり、入嫁後約五年で、萬治元年二十一才若死したが、その外に國史編集資料編集の爲めにも、光圀の京都との交結は頗る親密であり、長流の噂も傳えられたのであろう）。

九、寛文二年、三十八才、此頃、長流の「萬葉集管見」成る、同學の學弟格の僧契沖が大阪生玉の曼陀羅院住持となる時に二十三才。

十、寛文四年、四十才、これより先、兩親を失う、父は七十才、次いで母を、更に同胞を失う、この年、長流幼時述懐の長歌あり。

十一、同六年、四十二才、三條西家を致仕し、再び大阪に下りて住み、次いで又一二度、江戸に下る。

十二、寛文七年、四十三才、五月、この頃又江戸にあり、ついで歸阪す、秋、「二聖和歌注」成る、林葉累塵集の編集に着手し諸家の歌をあつめる。

十三、同九年、四十五才、今年前後、契沖との交游親密となる。

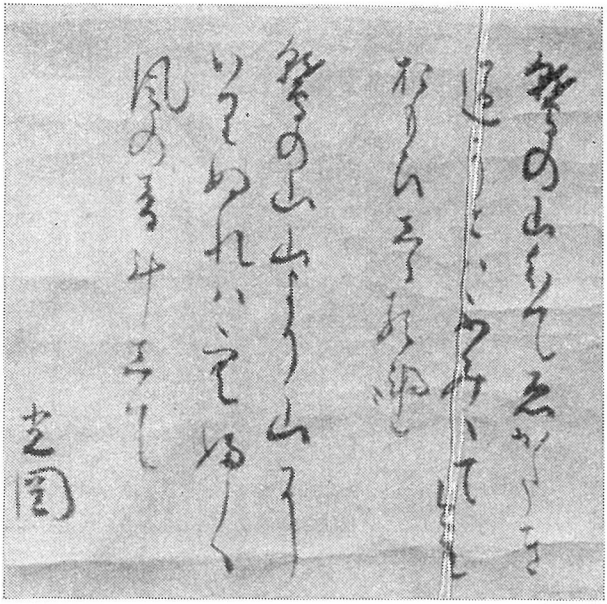
以下、筆者追補

契沖は此頃より約四年、和泉ノ國（大阪府）泉北郡（南松尾村）松尾村久井西山小字島の向ひの舊家辻森吉行（高野山信者）方に身を寄せ、同所、池田川の向いの小庵に住む（昭和廿五、八、廿五實査の時には小庵のアトは田地であった）ここには地名久井に因んだ古井がありその水は契沖も飲用として愛好したとの口碑あり、辻森家は數家あるがその後、辻井氏と改め現在に至っておる由。近頃、契沖研究に約五十餘年打ち込んでおる盟友久松潛一翁に會って、この久井訪問の事を話したら、同氏も昨昭和四十七年秋、始めて久井を訪うたとの事、その時にはこの小庵の舊地に約一米高さの契沖庵居址の碑が立てられてあった由。

十四、同　十年、四十六才、長流の著、枕詞燭明抄、林葉累塵雜刊行せらる。

十五、延寶元年、四十九才、この頃から、水戸より扶持米五十石を給ひ萬葉の注釋に着手し晩年發病までこの高囑にこたえた（契沖の代匠記に記あり）

注、この長流が、遠く水戸から高囑を受けたことは、當時萬葉研究が未だ寥々であったことが知られ、その時、篤學の光圀がこの野の遺賢長流を發掘着眼したことは、注目するに足る、序に光圀の一佚事を述べる。光圀が嘗て京の洛南、伏見深草の法華宗瑞光寺の篤學僧元政の孝養を聞き（八十の老母を背負って靈域身延に登山した時の身延紀行を見たのか）贈った片紙書きの歌が寺にのこっておる〔寫眞〕。元政はこの母を送った數年後、寛文八年、四十六才で老に至らず寂した。これを聞いた光圀は再び挽歌を送り神戸湊川の「嗚呼忠臣楠子」に倣ひ「嗚呼孝子元政」の文字を送ると、建墓をすすめたが、遺弟の僧慧明は



水戸光圀が京の深草の孝行僧元政の生前に贈った自筆歌二首

鷲の山、わけてゑがたき
道ぞとは、ふみゝて今ぞ
おもひ知らるる
（下のるは初めれを改めたもの）
（注、鷲ノ山は深草山の異名、二行目のふみは恐らく上出の「身延紀行」にて、この書は元政版下書きにて出版せられた）

鷲の山山より山に
入りぬれば、空ふく
風の音ばかりして
（京都伏見區深草瑞光寺藏）

「ワガ墓ニハ竹兩三竿ヲ」との遺命を重んじこれを辭退した、現在その通りで墓石なく竹三本で傳っておる、その折の挽歌は、既に元政傳にも引用せられておるが、この元政在世中贈った二首（用紙は片紙で第一首直しの儘である）は未だ何書にも出ておらない、ここに東京の同宗、日ポリ本行寺の好學賀茂日童老師を煩わして入手した寫眞をのせる、光圀は歌集も殘っておるが、自分の出自は武人だからとてレイレイしく懷紙短冊に書いておるのを見たことがない、これも偉人光圀の一見識であろう。

十六、延寶二年五十才

この頃、契沖、久井の北約八キロの同郡南池田村萬町の舊豪、大庄屋で高階（しな）姓、好學藏書家、伏屋長左ェ門重賢方に寄寓し庇護せらる（重賢の祖父は秀吉に仕えた伏屋飛驒守一安、元和元年五月七日、大阪落城の際殉節）居ること三年にて河内ノ國（大阪府）南河内郡小西見村鬼住（河内長野市の南約十キロ）に移り翌年、攝津ノ國（同府）住吉村我孫子（あびこ）權右ェ門屋敷に移った、因みに後年であるが、萬町伏屋の分家に蘭法醫で解剖生理學者伏屋素狄（てき）が生れた。通稱權之進號琴坂と稱し、大阪に出で橋本曇齊らと蘭法を修め堀江に開業、文化八年六十五才で終った、解剖生理を說いた奇書「オランダ醫話」等の名著を殘し昭和四十二年、日本醫師會、同醫史學會の手で南堀江あみだ池の名刹和光寺内淨域に建碑せられた。實はこの建碑は、私の實家が京儒醫並河家（この家は懷德堂にも學緣深い）その緣で醫史學同人であり、緣地である堀江和光寺の伏見誓寬尼ご院主にお願いして允諾を得たのである。更にこの伏屋素狄の名著「オランダ醫話」も最近、東京醫齒藥出版ＫＫよりホン刻出版された。

十七、同七年、五十五才、長流著萍水和歌集成る。

十八、天和元年五十七才

長龍（長流の初名又別名）和歌延寶集及び長ショウ歌仙成る、長ショウは長流の先師

十九、同三年、五十九才、この項、長流病を發し執筆、意の如くならず、遂に水戸より契沖に萬葉注釋の囑命あり、契沖これを謹諾し繼續したが、書成るの日、故人年長の長流を匠とし謙讓して代匠記の書名を用う。

次には昭和十五年十二月、大阪放送局編、同出版協會發行の「大大阪を培（つちかう）うた人々に」に「國學の先驅者を生んだ大阪」の命題で、市川寬氏の五頁にわたる一文の中に、長流について相當くわしく且つ具體的な記述がある。これを拔抄するのであるが、これも前引用と同じく重複事は避ける。

一、長流の實父、小崎某は、片桐且元の四男の、前引の龍田一萬石領知の片桐半之丞爲之の臣、三百石の食祿者で

あったようであると。

注、これについては同じく放送局から市村其三郎氏が、更に舊小泉藩記祿等で、詳細發表され、それが活字化されたものを見た記憶があり、偶然市村氏は現在、東京杉並區に移っておるのを知って、直接に伺はったが、大阪で二度戰災に會はれ、その記を失われ、謙遜もあろうが、現時點では殘念乍ら知る由もないのである。

二、長流の門人で、長流並び契沖の沒後、その遺書類を京都上賀茂神社三手文庫に寄納し、完傳せしめた京人、今井似閑（享保八年沒六十七才）の手紙の引用がある。卽ち

長流十八九才の頃までは向學の意なく、遊猟などに心をうつしておったのを、叔父某が意見したのが動機となって、急に和歌を學んだと。この似閑は萬葉緯等の著述もあり、京六條邊にて飛脚問屋を營んだ有學の商賈で、上賀茂社に遺書寄納は、同社の好學祠官、岡本加賀守清茂（寶曆三沒七十五才）が關與したのである。

三、契沖の門人、海北若沖（寶曆元、七十七才沒、森銑三氏によると通稱善右ェ門）は大阪人（恐らく商賈か）別に地理學者、並河誠所の敎えも受け五畿內誌の校者の一人である。この若沖の記中に、長流が天性節義を重んじ剛直にて人にへつらはないとある。

四、長流の四十二・三才の頃（寛文六・七年に當る）萬葉集疏抄の出版を企てたが、その事なく終った。

五、「難波雀」の歌學の部に江戸堀下河邊長流出づと。

六、攝津名所圖大成に、江戸堀に住みしと傳うるが、今そのあと傳らずと。

七、政田義彥の浪速人傑談には「居を鰻谷に卜す」とある。

八、西鶴の艶隱者の中に、「難波の歌翁」と云うが、四ツ橋のほとりで歌書や源氏を敎えた、これが長流か。

九、長流の門人に風竹（本名傳はらず）というがあり、この人の記中に、長流の門人の中のすぐれた者の名をあげてあり、三浦祐建、五井持軒、志水春流、寺田陽仲（注、五畿內誌校者の河內國道明寺村の寺田又右ェ門保正か）京人今

井似閑、塚口心住、西川勘兵工、淵田勘右ェ門、布屋久右ェ門、わたや與右ェ門の名が見られ、これらの門人達に、萬葉集、古今集、伊せ物語、土左日記などを教えたことも記錄されておる。

注、これらの門人の名前を見ても知られる通、當時學問好きの町人が相當あったことが知られ、それ故に、これらの町人の後援があって、長流の著述も數種が早く出版せられた、又風竹の筆記に、長流の講筵の會規として毎年の正月歌會には、兼題を暮の極月十日に出しておいて、四十餘名の門弟に、その十日後の廿日までに出詠をさせ、これに評點を加えて正月の初會に發表した由、しかし契沖だけは、年は若いが學才伎倆があったので「長流が下には置かない」といって、いつも披露の卷物の卷頭に、先づその出詠を書かせたとか。

一〇、水戸光圀から長流に萬葉注釋の囑命があった時のことが、水戸藩士佐野卿敬の著「塵土抄」に出ており、即ち「下河邊長流へ五十人扶持下さる」とある。

以上で昭和以後發表の長流事蹟を止め、前後するが、大正十四年の長流墓の再建について述べる。この再建は實は、同好者と共に私も發起者の一人として微力を致したがその同好の年長二人は既に故人であり旁々これの發起せられた經過を述べる。

大正六年、遠江ノ國濱松生れの國學者、賀茂眞淵の宗家の後裔の岡部讓翁が伏見稻荷宮司として着任された、眞淵は私の同族荷田（かだ）東丸の門人であり、享保十八年、上京し、滯留約四年、この稻荷に來て教えを受けたのである。岡部宮司は、その頃、神職界の長老で交友廣く、博學で和歌に長じ、偶然その官宅が、拙宅の隣りであり、舊緣もあり方外の交りを許され、當時私は京都師團勤務の軍職であったが、實は前宮司の大貫眞浦翁に和歌の手ホドキを受けた如き經歷あり種々教えられる處があった。

一日、佐佐木信綱氏が岡部翁を來訪せられた。その時、岡部翁からの勸告があって伺い、初めて佐佐木氏に紹介せられその夕、共に會食の機を與えられた。次出の大阪實業人故森繁夫氏も、岡部翁へ來訪によって紹介されたのであ

る。

大正十二三年頃の夏、佐佐木翁の紹介で、上出の久松氏が來訪で、この時、紹介の爲め同行して同族の東羽倉の東丸らの遺書類を調べた處、その中に東丸が寫した契沖の代匠記更に同寫の長流の萬葉管見四册、年山紀聞を發見し、今までの東丸傳には師尙するところなく自得發明多しと、殆んど獨學の樣に書かれておる事について、なお再考すべきであろうと認識を新たにすると共に長流の學の傳統の小少ならざることを今更の如く知った。後年の建墓はこれらもその一因である。

その後、前記の森繁夫氏と屢々往復した。氏は岡山縣人で、東上して早稻田に學んで大阪商船に入り、若くして經理の司掌に充てられ、事務の才幹あり書字巧みで、中橋德五郎（後の文相・商工相）に認められた。氏長ずるに及んで、歌人の筆蹟に興味を寄せ、鑑識高く短册の蒐集に於て、更に正確な先賢傳記の研究に於て優に一家を爲し、佐佐木翁及び井上通泰翁の如き斯道人にも推稱信賴せられ、その勞作名家筆蹟考、人物百話など學界に相當益を與えた。

一日、この森氏と會語の機に長流の建墓の議が話題に上り、次いで相談の上、先づ長流と同鄕近くの大和宇田郡生れの賣藥、盛業（ロート製藥會社創始）の山田安民翁に、森氏から先づ書を裁し豫め意見を叩いた處、翁は歌人で、お歌所長入江為守子に師事し、書にも巧みで、筆蹟類にも興味を持たれる同好者であるので、日ならずして快諾を得、當時翁は奈良市高畑町（舊春日社家町）三笠山を近くに仰ぐ別墅に常住であったが、宇田郡伊那佐に舊宅があり、できれば、共に長流の實家の問合せの現地實査もしたい、その為め伊那佐舊宅に一泊がけでお越しをとの懇命に接した。

よってその言に從い宿のお世話にあづかり、すがすがしい田野の秋日、心こめられた野趣味豐かな淸雅な食事の接待をうけ、その間、建墓についての準備段取を協議し、併せて翌日は全く徒歩（その頃は車の便なし）で、色々聽取など舊地について調査した。山田翁既に六十才を超えておったが、徒步約二―三里を、和服の裾を端折って道案內された。この邊は翁の故鄕、既に盛業の身で好々爺、後進の為め盡され、行く處で迎えられ、それに一々丁寧に應對され、

森氏と共に言い知れぬ羨しさを感じ、松山町の料亭で里人四五をも交えて晝食のお振舞をうけた。この時の聽き取りは、拙生これをまとめて記述し、「長流事蹟考」――謄寫刷――を作った。これは佐佐木翁監修の朝日新聞社發行の契沖全集附刊の長流全集（二卷）の中に收載されておる。幸いに今日生殘の身、この機に同志同好の先輩故友の在世を偲んで述べておく。

かくてこの議は追々具體化して來て遂に大正十四年六月三日、長流の忌日に、東區餌差町の長流唯一の學友の契沖永眠の圓珠庵内に、略ゞ契沖と同型のものが建てられたのである。當日佐佐木翁はわざわざ西下し、除幕法要に參列せられ、併せて當日の「朝日新聞」に感慨並びに喜びの一文を寄せられた。次のものである。

大阪朝日新聞、大正十四年六月三日（水）大阪版

「一日一文」題、下河邊長流、故佐佐木信綱翁寄稿（文中に翁の上三分身小照あり略す）

本月本日（大正乙丑）六月三日は、大阪の地に最も關係深い學者、下河邊長流の沒後二百四十年に當るので、その墓碑が山田安民・森繁夫・羽倉敬尙三氏の發起のもとに生前莫逆の交りのあった契沖阿ジャ梨の墓と並んで東高津圓珠庵に建てられる事となった、浪華人物誌に「長流の墓は玉造の東の大今里村にある由、葛城氏の筆記に見えたれども今廢して無し」とあるを以て見るに、その廢墓となったのは久しい以前のことで、大正四年、今上帝ご卽位に際し、その遺功を追賞して正五位を贈られたが之を告ぐる碑も無くその子孫も無い。今回墓碑が建てられた事は眞に喜ばしい極みである。

天和・貞享の頃に當って大阪は、文藝の中心地として文豪輩出の觀をなした、當時長流は鰻谷に住み、西鶴は鎗屋町に近松は平野町に住んでおった、文藝史上、長流の事績は他の二人の如く華々しくはなかったけれども時代の先覺者として沒すべからざる功があった。

長流は大和龍田の人、大阪に出で生涯を送った、畸人傳に大和宇田とあるは誤りでその「遂にわが着ても歸らぬ唐

錦たつ田や何の古里の山」の詠、又契沖が晩花集の序及び萬葉代匠記卷五の注の中にも「長流が立田に生れて彼のあたりをよく知れるが申しけるは」とある、初め具平と稱した後、長龍と改め更に浪花堀江の長き流れに因んで長流に改めた、長龍長流と音同じくして唯文字のみを改めたのである、而るに世に之をナガルと訓讀しておる事の誤りであることは、自分が夙く長流事略によって知って、ものにも記したことである。

その國學の師承は明らかでないが彼れが木下長嘯（ショウ）子と關係のあった事は、その著書に長ショウに對して敬語を用いておること、又延寶五年湖海狂士の需めに應じて長ショウ歌選を撰したことなどによっても知られる、その名も長ショウ子の名を襲いだものと思はる（因みに云う、湖海狂士の文は初めて余が見た折、箱の表に海北若沖筆とあったので若沖と記したが後、その誤りなる事を知った、余の誤りを引用した文などがあるから殊更に茲に述べておく）而して長流が著書中に師說として擧げておるものによると、或いは松永貞德にも敎えを乞うたかと憶測せられる、長ショウ子と貞德との關係から考へ、更に長流の引用した說と貞德の著書の說とを對照してこの問題は解說せらるる時が來ることと思う。

且つ又長流の學問が初め堂上歌學から出發した事は、その著、枕詞燭明抄に「古人髓腦の說、殊には西三條內府實隆卿のお說を用いたり、私の管見をも所々に加う」とあるによっても明らかである。

しかも堂上歌學から出發して堂上歌學の弊を打破した事は江戸に於ける同時代の改革者戸田茂睡と軌を同じうする、茂睡が都通傳を受けつつ堂上歌學を極力攻擊した如く長流は「口傳秘授など言えるは愚かなる事なり」と喝破し其撰にかかる林葉累塵集の自序に「世に司位ある人は我が輩にあらざれば、その人々の歌に於ては稀れにも之を載することなし、唯、位なき武士の八十氏人を初め或いは市に荷う商人或いは山田に作る農夫或いは樹の上、石の上に在所定めぬ桑門の言葉に、さるべき一ふし籠れるをば之を尋ね來む」と記して庶民の作から選拔した、これ蓋しその初めに「やまと歌は大よそわが國民の思いを述ぶる言の葉なれば、上は宮柱高き雲井の庭より下は芦葺の小屋の住處に至

るまで人を分かず處を選ばず見る物に寄せ聞く物につけ皆その志を言ふ事となむ」との主張に基づくものである、長流のこの序文は、戸田の梨本集と共に頗る注意すべきものである、梨本集の鋭き筆鋒の當るべからざるものあるに比して、これは婉曲に述べてはおるけれども、共に新時代の先驅者としての意氣が見られる。

長流にはその無二の交友として僧契沖がおった、長流は契沖より十五才の年長者であったが、その管鮑（ポウ）の交りのあった事は、恰かも時を同じうした茂睡と山名玉山又後の谷川士清と本居宣長との關係に酷似しておる、而して契沖に長流の影響を見るのは、後に香川景樹が小澤芦庵の影響を受けたと相似て、それよりも深いものがある、ある意味に於て契沖は長流の繼承者とも言うべく長流の學問を大成したものとも言える、この長流が契沖に影響を與えたことは長流の價値を益々大ならしめる所以のものであるものとも言える、長流の著書について自分は早く京の上賀茂社の三手文庫に於て「萬葉古事並ニ詞」「古詠並ニ古事」「愚問雜記」等自筆の稿本及び「歌仙抄」「百人一首三奥抄」を見、更に大阪四天王寺門靜院の舊藏にて現在、大阪殿村家に秘藏の「四季出題抄」「長龍延寶集」「長ショー歌選」を初めて見るを得てこれを學界に紹介したが、同學橋本進吉氏は長流の著書を深く研究して數種の論文を發表せられ、今日判明しておる長流の著書は上記の外に「萬葉集管見」「枕詞燭明抄」「神佛二聖和歌注」「六々歌仙贊」「萬葉集名寄」「續歌林良材集」「材林和歌抄」「「晩花和歌集」「林葉累塵集」「萍水和歌集」「萬葉集抄」「僻考集」の二十種が數えられる、此中の萬葉抄は同學武田祐吉氏が本年二月、大阪圖書館で發見、初めてこれに注目し、上述の橋本氏の研究によって、長流に萬葉管見以外にこの著あること確め得たもの又、僻考集は同四月、水戸彰考館に於て橋本・武田・久松の三氏及び余を交えた一行が採訪の折、橋本氏によって發見のもので、これらは最近長流の著書中に未知の二部を加え得たのである、又材林和歌抄は從來彰考館の寫本が知られておるだけだったが、去る二月、伊せ桑名竹内文平氏のもとで自筆本を見ることを得た、而して上述の二十種中九種（外に長龍延寶集の略本である自筆晩花集）は德川時代に刊行せられ、萬葉集管見については東大所藏の自筆本は一昨年の震災で失われたが、幸いに水戸の寫本

により最近武田氏が校訂し橋本氏の序説を添えて刊行された、しかも長流の全集刊行は從來、企てられずに過ぎてきたが、今回朝日新聞社に於て契沖全集が刊行せらるる計畫が熟し、この機に長流全集を附刊する事となった、これによって長流の眞價が愈々廣く世に知られることは本日の建碑と共に眞に喜ぶべき事である。

自分は明治四十年、京都での香川景樹の桂園樹立百年記念祭に故高崎正風翁らと共に參列し、昨年は同じく京都にての大田垣蓮月尼の五十年忌につらなり今回この長流の建碑に參會し得たのは後學として眞に喜びに堪えない、かくして故人の業績をたどり更に新らしい道に進まんことを希うてこの一篇を長流大人の靈にささげる（大防朝日新聞樓上にて）。以上

この建墓に先だち、大正十三年十一月「難波津」第十號に森氏は小竹園主人の雅名で「浪華歌人列傳」を寄せ、その（第一）に(1)に年代の上から加藤磐齊（松永貞德門、延寶二沒、五十四才）を(2)に長流を叙し、文中には建墓の前觸れをも述べた。又同誌第十七號（大正十四年六月發行）には、建碑式參列の船越氏の一文があり、同誌、その次に森氏の長流肖像についての一文がある。この長流像は奇緣にも同氏が偶然、他の同時代の先哲のものと共に發見入手したものである。更に建墓のハルカ後だが、昭和二十二年十月、「阪急」の「日本美術工藝」には、森氏が浪華歌人和學者雜事の題で、約四頁にわたって、長文の寄稿がある。

贈正五位下河邊長流大人碑

（圓珠庵門前向って右に「贈正五位下河邊長流大人墓所」の石標が建墓と同時に建てらる，門前に向って左には學弟，契沖墓の石標あり）

この建墓は實は、商都大阪では從來アマリ知られず過ぎてきた國學者下河邊長流であったが、契沖の年長先輩で、相當に大阪住民を弟子として敎えたことなど、この近世草わけ國學者が大阪に住んだことは、一つの大阪の誇りとなり、又大阪人の恩人といった見方もなされ、更に山田、森と云った實業人が發起人であり、百六拾餘名（大阪人が主で）の賛同を得、その資金も大した苦勞なく集まった樣で、實は私も發起人の手前、貧灯を挑げたので、完成後、決算報告など貰ったが戰災で失い、具體的には云えないが、記憶するところでは、山田翁の歌師、入江子爵や佐佐木翁、更に山田翁令弟の中將湯本舗經營の津村重舍翁（貴旅院議員）その他、知友有力者の物心兩面の賛助があった事は明らかである。

圓珠庵門前向った左側には「史蹟契沖舊庵圓珠庵並に墓」の石標が、既に立てられてあるから、右側に「贈正五位下河邊長流大人墓所」の石標が立てられ、寺内の墓は、契沖墓と略同じ大きさで相對し、契沖の側面に東向きに長流のは建てられたのであった。

しかるにその後、昭和二十年の戰災を受け、長流のは、火の廻り具合か、或いは石質の為めか甚だしく磨滅した。その後、幸い大阪で私に緣故墓修理の序があったので、コンクリートで假つづくりをし剝落を防いでおいたので墓表長流の文字は明らかに讀める現狀にある。門前の標石は何ら異常なく存しておる。

以上の樣な經過によって、長流の芳靈慰安の場は作られたのである。今からは早や約五十年前の話であるが、時々思い出しては無量の感をおぼえ、この美事が難なく出來たのは、全く今は亡き山田・森兩翁の功であり、殊に長流と出自同鄕の山田翁の功が大であることを强調するのである。

この事あって後、歲月は流れて昭和十五年その前、同十二年七月末、中日事變勃發頭初に、余は應召に會い、韓國經由で中國天津に至り、南口から復舊直後の鐵道で長城線をこえ、宣化を通り大同から陸路、山西省に入り首都の太原攻略戰に參加、太原を占據して、ここに駐屯すること約二年、一時南方の臨汾（堯舜の故址）から更に南方の運城

（禹の故地）に至ったが、内地部隊（東京第一師團）に轉勤となり、次いで同十五年十二月、大東亞戰にて、大阪の中部防空師團に轉屬となった。

その頃は未だ内地の空襲もない頃で、情況に應じ、將兵上下共外出時に外泊も出來たが、當時のルス宅は東京青山であり、歸宅の代りに、京阪知人宅を訪ねたので、奈良の山田翁に詣り久濶を謝しとめていただいた。その頃、民間では徐々に統制經濟であったから、少々ながら自分割當ての食品缶詰などを持參した。大阪では閑ある毎に森氏とも往來した。

その間、又三人相談して、建墓の後、偶然、森氏入手の長流像の副本三枚を、京の有職畫家原在寛畫伯（名人在仲の後裔）に委囑して作らせ、その一枚に山田翁賛語を記し、表裝して東大史料編纂所に寄納した。それは同所には、長流・契沖に關心深き大阪育ちの岩橋小彌太翁が編集官として在職であったからであった。

ところが實は戰時中のこととて、この表裝が遲れ山田翁は昭和十八年四月その完成を見ず七十五才の天壽で終られたが、男輝男社長がその遺志を繼いで寄納せられた。（寫眞前出のもの）

なお、ここに他事ではあるが山田翁の干與實は余のお願いしてやっていただいた一事を述べる。これも戰時中、奈良で翁を訪ねた時のことである。

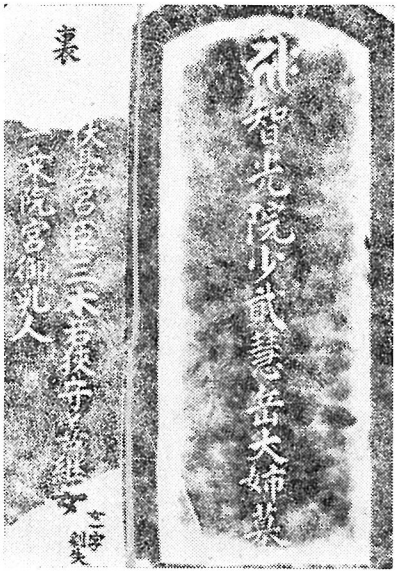
それは奈良市菖蒲池町、眞稱名町に墓のある京の伏見ノ宮諸太夫三木若狭ノ守善繼の女名ツルで、若くして伏見ノ宮邦家親王第四子、後の奈良一乘院門主尊應入道親王（嘉永五年、一乘院から京東山三條の青蓮院の門主に轉じ尊融と改名、後の久邇ノ宮朝彦親王）のお乳ノ人となった女性についてである。伏見ノ宮、王子の乳母に王家の臣、三木氏の女が選ばれたのである。

この女性のことは、宮の奈良時代の弘化三年正月、幕府出先の官、奈良奉行に赴任の川路左ェ門尉聖謨（としあきら）の「寧府記事」――寧府は奈良――に出ており、賢婦で、壯年血氣の宮に仕え、その逸事が記されておる。（故樹下快

淳氏の示教）但し名や出生はわからぬ儘だった。余は先づ、奈良住の山田翁にお問合せを願ったが不明で、唯一乗院傳藏の同院門主傳の寫しを送っていただいた處（寫しは翁自筆であった）、そこの宮の條下に「乳婦ハ三木氏ノ女、少貳（注、仕え名）ト稱ス」とあったので、これは恐らく伏見家臣の三木氏だろうと追究した處、カンは當り三木家當主の善健辯護士（上記の善繼の子、冬胤は私の少年時面識ありその子）に問合せて初めて氷解し、墓が奈良にあるワケも判明した。この三木家は現在、伏見桃山の、もと府社御香宮の歴代社家現當主、善之宮司の分家に當る家で、代見ノ宮家が南北朝時代、京を避けて、現桃山ご陵地の山麓地域に住まれた頃（この縁で、伏見の稱號――名字を冠した）鎭守神の社家の縁で次男が分れて宮家の臣となり仕へたのである、この三木氏ノ女は弘化四年四月四十四才で終り、川路奉行の就任は弘化三年正月であるから、この一年四月の間のことを述べたのである。

實はこの女性三木氏のことが判明したのは、去る昭年十六年、この頃、恰かも中國から歸國し東京勤務の間、宮の五十年紀で、伊せ神宮に於て祭事が行われるので、その際の記念出版に、特にご縁故ある余に宮の周邊事を文にまとめて發表をとの依頼があり、幸いに判明したこの乳母のことも加え、神宮發行の「親王景仰錄」中に「粟田の落穗」の題下に寄せておいたのである。この調査の結果は山田翁にも報告した。この宮の第四子、故梨本守正翁（昭和廿六歸幽七十八才）の生母は、同じく奈良興福寺塔中の一乗院、近習原田氏女（名光枝、余も面識あり昭和六沒八十六才）墓は奈良法蓮町興福院（こんぶいん）で、この原田家本宗、奈良住の豐次郎氏は山田翁も相識の間柄である。

かくて昭和十八年、大阪駐在中、山田翁訪問の節、前年、一乗院門主傳、お送りの關係もあり、談この乳婦三木氏の事に及び、同行して實は初めて余も展墓した。寺内墓域廣く、案内なくしてはわかりにくい壁ギワであった。聞けば京都からは離れてもおり、數年前に參られた位との事、せめて墓背に刻記しておいて萬一の佚亡にも備えたらと、山田翁にはかった處、京都三木氏の同意さえ得られたら、出入りの石屋もありお安い事、文を書いて送らるれば、一切お引受けするとの快諾を得、余は三木氏の承諾の後、奈良に縁深い梨本王家にも申上げ報告し、これも山田翁のお



智光院少貳慧岳大姉墓
向ツテ右側，弘化四年四月四日沒四十才
伏見宮臣三木若狭守善繼女
一乘院宮御乳人（ウラ昭
和十八年追刻）表石，高サ60センチ

の「匠」と敬意を表して書名「代匠記」に殘した長流の文功と共に永く忘るべからざるものであろう。後年、長流沒に契沖は嚴命により更に精選の代匠記をつくるが、義公光圀はヤハリ代匠記の書名をその儘襲用せしめた。遺賢の文功を忘れない謙虚な名君の心じらひはゆかしい限りである。森氏は昭和廿五年、坂神向陽園はり半旅館に近い目神山で終った。六十九才。

長流の學が懷德堂の學問を益した餘響は、今更贅言の要なく、その學は先づ學堂先學の五井持軒に傳えられ、開創なお年淺かった學堂の學は、この持軒の子の和漢兼該の碩學蘭洲によって殆んど基盤が固められたのである。天囚子の蘭洲傳の講說が、學堂再興の發端となったことは偶然ではない。天囚子は「考」に

學堂の先儒中井甃庵は、二男子竹山・履軒に對し蘭洲子はわが畏友なり、汝等これを師とせよと敎え、又蘭洲傳に和歌は儒者の歌人と云はれし執齊（三輪希賢）に劣らず、萬葉・古今・勢語・源語に通ず

と、これ明らかに、蘭洲は長流の學を父から受けたのであると述べ、更に

蔭で上の通りの刻記が完成した。上記の緣故者原田氏も、今まで全く知られなかった女性が初めて世に出たと喜ばれた。

私は時に命題をヨソにして脇道の道草を摘みつつ、長流の建墓について長々と述べた。これには聊か私も參與したが、長流と同郷のユカリから故人山田翁が先頭に立たれ、篤學熱誠の故森翁の終始盡力の實狀をも傳えたいからで、この遺事は契沖が年長

蘭洲沒せし時、竹山三十四才、弟履軒三十一才欝として（二人後に至り）一家を成せるものは實に蘭洲の恩なり、蘭洲なかりせば、わが大阪に竹山・履軒の二大家を見んこと如何あらん、而して學堂他日の盛を海内に鳴らせし所以の者、實に蘭洲の力量に根柢す

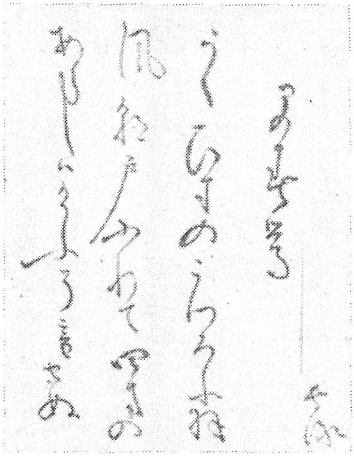
と、蘭洲を頌する為めの豐碑の名文に代値する文であろう。名儒にして歌人蘭洲を頌して、その先師、斯學草わけの長流の姿を瞼に浮べ、その先功を想うこと切である。

思うに浪華の隱士長流は、名君水戸義公光圀の明鑑によって世に出で、萬葉研究の囑命を受けたが不幸、病の為め業半ばにして終った。

再言ながら長流の學弟契沖によってこれが繼承せられて有終の成果がおさめられた、謙讓なる沖も代匠記の書名で永く、亡き師友、學兄長流の先鞭の功を傳えた、水戸へは長流・契沖二人共下りはしなかった。一面、先師長流は、大阪に於て帷を下し、多くの門人を敎え、その學の餘響を公學懐德堂に傳えた。生命、財産には名數がある。精神的訓化は目に見えないが、傳統して不滅、殆んど止まるを知らぬのである。

ここに稀に傳わる隱士長流の歌稿、その高弟五井持軒、三宅石庵（萬年）以下の懐德堂先賢の短册を掲げ、長流一派の先學が美果をおさめた一端を證示する。

この文の為め大阪の後藤捷一、水田紀久、肥田皓三、野曾原殖、奈良天理大の木村三四吾氏の諸賢から種々紹介の勞を煩わし資料をいただいたことを記しておく。



早春鶯　長流

うぐひすの、うつろふ羽
風、朝戸ふれて、四方の
あらしは、けふぞ音せぬ

（（複製）東京、本居彌生氏藏）

時鳥ヲ待ツ

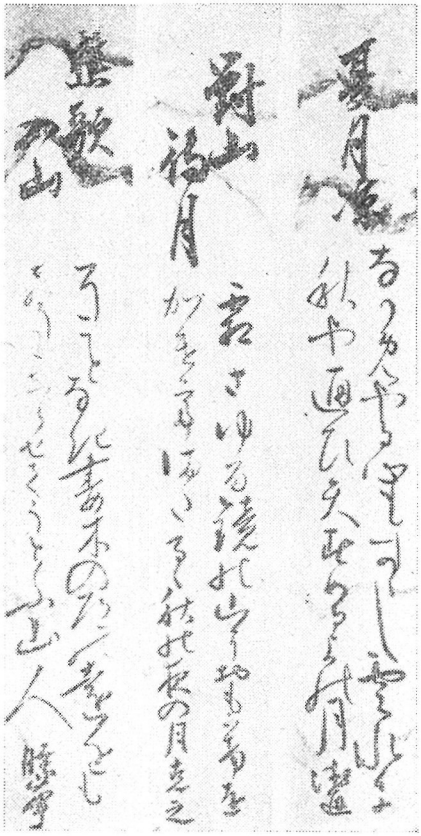
この夕、待たでも月は、出でにけり
などかつれなき、山ほとゝぎす

五井守任（持軒）

晩節

誰かさは、事ぐさしげき、世を經ても
老いたる馬の、道し忘れぬ

三宅正名（萬年また石庵）



富永德通、號芳春、懷德堂創立に盡力の實業人五同志の一人道明寺ヤ吉左ヱ門（醬油業）、初め持軒門のち石庵門有名なる哲學者仲基號謙齋の父、元文四沒、年令知られず。

長崎克之、號默淵、同じく五同志の一人、舟橋ヤ四郎右ヱ門、富永と同じく前後二人を師とす、寶暦十二の前頃沒、年令知られず。

中村睦峰、同じく五同志の一人、號良齋、三ツ星ヤ武右ヱ門、石庵門、享保十七沒六十才。

（五同志の二名は吉田盈枝（備前ヤ吉兵ヱ）明和四沒七十五才（舩板問屋）と、山中宗古（鴻ノ池又四郎）寶暦四沒六十三才の筆蹟、入手に至らず。）

（なお學堂五同志の名は「考」によって世に知られたが、その他にも支援出資の者あり）

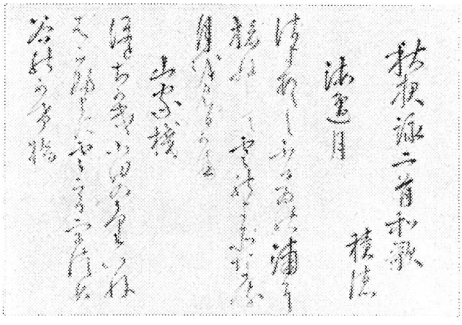
現在の北濱五に金崎氏尼崎ヤ市右ヱ門名は道可、同七右ヱ門元之が享保度の學堂創立時、道可は醬油やにて盛業の資産家で、上記の五同志と同じく學堂經營に盡しており、外にも一門同族あり文化四年の記錄にも名出づ、墓は西天滿大林寺か（昭和四十七、十二月「大阪府の歴史」府立圖書館肥田氏の諸書引用の文による。

なお筆者も嘗て最後の學堂教授並河華翁の日乘「居諸錄」に、前代の古金ヤ助二郎の記事を見た。

冬至　けふのみや、戸ざしとゞめん、年月は
隙ゆく駒の足柄の關　積善

（中井竹山の本名積善、履軒兄弟は蘭洲門）

以上短冊六葉、大阪府岸和田市佐佐木勇藏氏藏
（同氏の著「心のふる里より」）



中井積徳（竹山の弟履軒）和歌

秋夜、二首ノ和歌ヲ詠ム　積徳

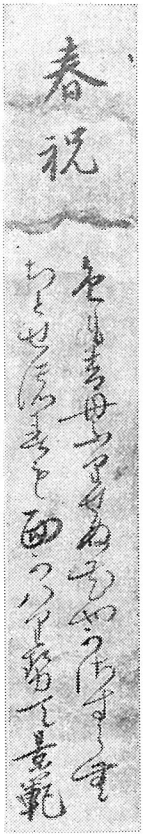
海邊ノ月

さよあらし、ふけひの浦に
旅ねして、雲のよそなる
月を見るかな

山家ノ棧（カケハシ）

程近き、小田の刈稲、
はこぶ間に、雲こそうづめ
谷のかけはし

（京都、革島久彦氏藏）
〔竹山妻の家〕



春祝

色も香もふりせぬ花やかざすらむ
千年の春も面（おも）かはりせで

加藤景範、歌人信成（公家烏丸光榮門）の男、號竹里、郊外小松村住、藥種商、小川屋喜太郎、石庵、蘭洲、竹山及び公家烏丸光胤（和歌）に學び、寛政八沒七十七才、門人頗る多し